阪神タイガースと甲子園野球
A study of HANSHIN,Tigers and Koushien baseball

1K09B222-6　　渡部 翔大
指導教員　主査 友添秀則 先生　　副査 宮内孝知 先生

【目的】

阪神タイガースの変遷や阪神甲子園球場、阪神ファンなどについて調べ、チームそのものについて、そしてチームを取り巻くものについて、更に他との比較におけるチームの表象のされ方を明らかにしていく。なぜ、野球において甲子園球場だけが聖地なのか。そのような聖地と呼ばれる場所での連敗に厳しい罵倒は殺到する。しかし、連日阪神側のスタンドはほぼ満員である。負けていてもなお愛される理由は地域性や文化にあると予想する。そこには「東京には負けない」という対抗心や「東京に取って代わり関西が一番返り咲く」などという曲がった想いを強く感じる。このような地域性が伝統の一戦・巨人戦になると爆発されるのではないかと予想している。チームの歩み、関西人の特徴などや地域性、文化などを考え、自身が知るうえで本研究を進めたい。

【方法】

松木(1985)の「大阪タイガース球団史 1985 年度版」と大井(1958)の「タイガース史」を中心に、インターネットの文献も活用しながら研究を進める。また、文化に関してはフォーラム現代社会学に掲載されている杉本(2006)の阪神タイガースファンにみる大阪文化を主に活用した。

【第一章】

第一章では、阪神タイガースという球団の変遷を明らかにするとともに、球団の結成から現在までにどのような課程を経て発展、また日本に派生していったかを明らかにした。戦争の問題や人数減少問題を乗り越え、たった一度だが日本一を経験し、関西を湧かす。暗黒と呼ばれた低迷期、その暗黒を斬り裂く名将の出現など、記録よりも記憶に残る球団史の数々である。変遷を知るなかで、私が抱く「情熱」というイメージそのものが歴史に刻まれていた。約 80 年に渡る球団には、チームスタイルとして決して崩さない一貫性と、常にリーグ上位を誇るファンの数という支えがあった。単に歴史の長さで得るものではないことが証明できた。

【第二章】

第二章では、甲子園球場の変遷や概念、聖地的性格を明らかにし、どのような歴史を歩み、時代に順応して形を変えたか、聖地と呼ばれる由縁など、歴史の長さだけでは語ることのできない甲子園球場そのものを明らかにした。甲子園球場のコンセプトは①歴史と伝統の継承、②安全性の向上、③快適性の向上とされていたことが分かり、時代の流れに沿い、人々に愛されるための形に変わっていったことも明らかとなった。また、甲子園球場は「日本全国の頂点を争って繰り広げられるもの」という性質を含んでいるおり、建設当初は野球の使用が大概で、他の競技は足を踏み入れることができなかった。しかし、時を経て様々な提供を行っている。第一章と共に、単に歴史が長いだけではなく、需要に反せず形を変え、その中で得た性質や概念、聖地としての確立が唯一無二のものとなった。そういった日本における甲子園球場そのものを明らかにした。

【第三章】

第三章では、阪神タイガースファンの応援行動に着目し、そこから、関西・大阪の文化を明らかにした。発足当初からの商人文化に着目し、現在まで受け継がれる関西文化としての特質を明らかにし、応援行動から、関西・大阪の文化について明らかにした。これは、「感情」を「勘定」に読み替える大阪商人の文化や独特のイントネーションが引き起こす仲間意識などが影響していた。そして、日本人特有の「敗者の美学」に対し、タイガースファン独自のスタイルと呼べるものを確立している。紛れもなくそこには関西を拠点とする阪神タイガースファン特有の文化があり、その文化が長い年月を経て日本全国へ派生していった。

【結章】

現在ではどの球場へ行っても阪神側のスタンドは満員御礼である。天下の台所と呼ばれた時代からの商人文化を引き継ぎ、一貫性を保ちながら栄えてきた。阪神タイガースの強さの 1 つともいえる「ファン」と「応援」、そして、昔ながらの文化を貫き通す関西人を明らかにした。地域に根ざした球団であることを誇りに、時代の流れや需要に正直に答え、時間をかけて得たファンを興奮の渦に巻き込む努力が必要とされる。一方ファンには、発足当初から脈々と引き継がれた関西特有の商人文化や、独特のスタイルを変えることなく球団の応援に足を運ぶ努力が必要である。